甲號	
支部	管轄區裁判所
八王子	八王子
八日市場	八日市場　佐原
木更津	木更津　北條
土浦	土浦　麻生　龍ヶ崎
下妻	下妻
栃木	栃木　佐野
熊谷	熊谷　大宮
高崎	高崎　富岡
濱松	濱松　掛川
松本	松本　上諏訪　大町　福嶋
飯田	飯田　伊奈

上田	上田　岩村田
新發田	新發田　村上
長岡	長岡　柏崎　六日町
高田	高田　糸魚川
相川	相川
宮津	宮津　峰山　福知山　舞鶴
洲本	洲本
姫路	姫路　社　龍野
豐岡	豐岡　村岡
津山	津山　勝山
彦根	彦根　長濱
小濱	小濱　敦賀
七尾	七尾　高濱　輪嶋

田邊	御坊　新宮
脇町	川島
中村	中村
宇和嶋	宇和嶋
岡崎	岡崎　西尾　豐橋　新城
山田	山田　木本
高山	高山
尾道	尾道　福山
赤間關	赤間關　船木
濱田	濱田　大森　益田
西鄕	西鄕
米子	米子　溝口
平戸	平戸　武生水
福江	福江
嚴原	嚴原
久留米	久留米　福嶋　柳河
小倉	小倉　行事
中津	中津　玉津
豆田	豆田
天草	天草
大嶋	大嶋
石卷	石卷　登米　氣仙沼
白河	白河
平	平
若松	若松　田嶋
米澤	米澤　長井

酒田	酒田
鶴岡	鶴岡
磐井	磐井　水澤
大曲	大曲　横手　湯澤
弘前	弘前　鰺澤　五所川原
八戸	八戸

乙號

支部	管轄區裁判所
沼津	沼津　下田　吉原
谷村	谷村
園部	園部
篠山	篠山　柏原
高梁	高梁　新見

玉嶋	玉嶋　笠岡
小松	小松　大聖寺
高岡	高岡　杉木新
西條	西條　今治
丸龜	丸龜　觀音寺
四日市	四日市　龜山
上野	上野
三次	三次　庄原
岩國	岩國　柳井津
萩	萩
嶋原	嶋原
唐津	唐津　伊萬里
八代	八代　八吉

延岡	延岡	高千穂
古川	古川	
宮古	宮古	
能代	能代	大館　花輪

○區裁判所出張所管轄區域表 明治二十三年八月司法省令第四號

區裁判所出張所管轄區域別冊ノ通改定ス但新置出張所開廳迄其管内登記事務ハ從前ノ管轄廳ニ於テ之ヲ取扱ハシム（別表略之）

○裁判事務ハ新置裁判所開廳マテ從前ノ管轄區域ニ依リ取扱ハシム 明治二十三年八月司法省訓令第二號

裁判所

本年法律第六十二號ヲ以テ裁判所位置及管轄區域被定候處新置裁判所開廳ノ儀ハ準備整頓ノ向ヨリ順次開廳スヘキ筈ニ候條裁判事務ハ右開廳迄從前ノ管轄區域ニ依リ取扱フ儀ト心得可シ

○判事檢事裁判所書記及執達吏制服 明治二十三年十月勅令第二百六十號

朕判事檢事裁判所書記及執達吏制服ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

判事、檢事、裁判所書記及執達吏制服左ノ圖表ノ通定ム

但明治二十三年十二月三十一日迄ハ「フロクコート」又ハ羽織袴ヲ以テ之ニ代用スルコトヲ得

判事制服表

種目 ＼ 裁判所別	大審院判事	控訴院判事	地方裁判所判事 區裁判所判事
上衣 地質	黑	地	同
上衣 飾	桐花七箇及唐草	桐花五箇及唐草	桐花三箇及唐草
上衣 製式	雜形第一圖	雜形第三圖	雜形第五圖
帽 地質	黑	地	同
帽 飾	雲	紋	同
帽 製式	雜形第二圖	雜形第四圖	雜形第六圖

檢事制服表

種目＼裁判所別	大審院檢事	控訴院檢事	地方裁判所區裁判所檢事
上衣　地質	黑地	同上	同上
上衣　飾	桐花七箇及唐草深緋	桐花五箇及唐草深緋	桐花三箇及唐草深緋
上衣　製式	雜形第一圖	雜形第三圖	雜形第五圖
帽　地質	黑地	同上	同上
帽　飾	雲紋	同上	同上
帽　製式	雜形第二圖	雜形第四圖	雜形第六圖

裁判所書記制服表

上衣　地	質	黑地
上衣　襟	飾	唐草深緑
上衣　製	式	雜形第七圖
帽　地	質	黑地
帽　製	式	雜形第八圖

執達吏制服表

上衣　地	質	黑又ハ紺色毛織
上衣　製	式	雜形第九圖
袴　地	質	黑又ハ紺色毛織
袴　製	式	雜形第十圖
帽　地	質	黑羅紗
帽　製	式	雜形第十一圖
帽　緑	章	真鍮日章（第十二圖）
鉛		銀子持緑
		黑包釦

○行政裁判

○行政裁判所處務規程　明治二十三年八月勅令第百九十二號

朕行政裁判所處務規程ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

行政裁判所處務規程

第一條　行政訴訟各事件ノ掛評定官ハ行政裁判所長官ノ指定ニ依ル

第二條　行政裁判法第八條ニ依リ評定官ヲシテ裁判長タラシムルトキハ同法第七條第二項ノ順序ニ從ヒ之ヲ命スヘキモノトス

第三條　裁判長ハ一事件毎ニ審判準備ノ爲メ掛評定官中ノ一名若ハ二名ニ專理員ヲ指命スルコトヲ得

第四條　裁判長行政裁判法第三十八條第二項ノ場合ニ於テ科罰ヲ言渡シタルトキハ書記ヲシテ訴訟ノ記錄ニ之ヲ記入セシム

第五條　毎年七月十一日ヨリ九月十日マテノ間ハ行政裁判所ニ於テ緊急ノ事項ト認ムルモノヽ外既ニ着手シタル訴訟ヲ中止シ並ニ新ナル訴訟ニ着手セス

第六條　行政裁判所ノ總會議ハ評定官總員三分ノ二以上列席スルニ非サレハ議決ヲ爲スコトヲ得ス

第七條　總會議ノ議事ハ長官之ヲ整理ス若シ長官故障アルトキハ評官中官等最モ高キ者之ヲ代理ス

第八條　行政裁判所ハ訴訟ノ呼出狀及其他ノ書類ヲ使丁若ハ郵便ヲ以テ送達シ又ハ通常裁判所ニ囑託シテ送達セシムルコトヲ得

第九條　行政裁判所ハ法律命令ノ範圍內ニ於テ其職權ニ屬スル事件ニ付告示ヲ發スルコト得

第十條　行政裁判所長官ハ法律命令ノ範圍內ニ於テ事務取扱ノ順序方法ニ關スル規定ヲ設クルコトヲ得

書記ノ職務ニ關スル規程ハ行政裁判所之ヲ定ム

○行政廳ノ違法處分ヲ行政裁判所ニ出訴シ得ヘキ事件　明治二十三年十月　法律第百六號

朕行政廳ノ違法處分ニ關スル行政裁判ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

法律勅令ニ別段ノ規程アルモノヲ除ク外左ニ掲クル事件ニ付行政廳ノ違法處分ニ由リ權利ヲ毀損セラレタリトスル者ハ行政裁判所ニ出訴スルヿヲ得

一　海關稅ヲ除ク外租稅及手數料ノ賦課ニ關スル事件

二　租稅滯納處分ニ關スル事件

三　營業免許ノ拒否又ハ取消ニ關スル事件

四　水利及土木ニ關スル事件

五　土地ノ官民有區分ノ査定ニ關スル事件

○行政訴訟豫納金手續　明治二十三年十一月　行政裁判所告示第二號

行政訴訟豫納金手續左ノ通相定ム

豫納金手續

第一條　行政訴訟ヲ爲ス者ハ臨時特別費ヲ除クノ外訴訟提出ノ際ニ於テ書類送達等ノ費用ニ充ツル爲メ金二圓ヲ豫納スヘシ

第二條　豫納ヲ爲サントスル者ハ當廳ノ保管金送付書ヲ以テ之ニ金員ヲ添ヘ大藏省預金局ニ納付スヘシ

第三條　第一條ノ豫納金ニ於テ仍ホ不足ナルトキハ追納セシムルコトアルヘシ

追納手續モ亦前條ニ依ルヘシ

第四條　豫納金ノ殘額アルトキハ訴訟事件終局ノ後之ヲ還付ス

○行政訴答書書式

明治二十四年七月行政裁判所告示第一號

行政訴答書書式左ノ通相定ム

何々訴狀

住所身分職業若クハ何府何縣何市何郡何町何村何職

原告　氏　名　年齢

住居ノ地行政裁判所ヨリ八里以上ニ在ルトキハ其里程

（訴訟代理人アルトキハ此處ヘ其住所身分職業ヲ肩書ニシ氏名ヲ記シ頭ニ訴訟代理人ト記スヘシ辯護人アルトキモ亦之ニ準ス）

被告官廳　氏　名

（被告官廳ニアラサルトキハ何府何縣何市何郡何町何村何職氏名若クハ住所身分職業氏名）

一定ノ申立

何、、、、、、、、

事實

何、、、、、、、、

理由

何、、、、、、、、

立證

何、、、、、、、、

行政廳ヨリ處分書若クハ裁決書ヲ交付シタル年月日

何、、、、、、、、

年　月　日

行政裁判所長官宛

（訴狀ハ正副兩通ヲ出スヘシ若シ被告數名ニシテ其住居各八里以上ヲ離隔スルトキハ其數ニ應シテ差出スヘシ）

何々答書

原告　氏　名印

（訴訟代理人ナルトキハ代理人署名捺印スヘシ）

被告官廳　何官　氏　名

（被告官廳ニアラサルトキハ何府何縣何市何郡何町何村何職氏名若クハ住所身分職業氏名ヲ記シ又訴訟代理人又ハ辯護人アルトキハ訴狀署名ノ例ニ倣フ）

原告　氏　名

（訴訟代理人又ハ辯護人アルトキハ訴狀署名ノ例ニ倣フ）

一定ノ申立

何、、、、、、事實

何、、、、、、、理由

何、、、、、、立證

何、、、、、、

年 月 日

被告 氏 名 印

（訴訟代理人ナルトキハ代理人署名捺印スヘシ）

行政裁判所長官宛

（答書ハ正副兩通ヲ出スヘシ）

證據物寫

何、、、、、、、、、、、、、、、、、、

、、、、、、、、、、、、、、、、、、

右相違無之候也

年 月 日

原告（被告） 氏 名 印

（訴訟代理人ナルトキハ代理人署名捺印スヘシ）

行政裁判所長官宛

（證據物寫ハ正副兩通ヲ出スヘシ若シ被告數名ニシテ其住居各八里以上ヲ隔ルトキハ其數ニ應シテ差出スヘシ）

○訴訟法

○民事訴訟費用法 明治二十三年八月法律第六十四號

朕民事訴訟費用法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム此法律ハ明治二十四年一月一日ヨリ施行スヘキコトヲ命ス

民事訴訟費用法

第一條 民事訴訟法ノ規定ニ於ケル訴訟費用ハ以下數條ノ規定ニ從ヒ之ヲ算定ス

第二條 訴狀其他總テ書類ノ書記料ハ半枚十二行二十字詰ニ付キ金二錢五厘トス但半枚ニ滿タサルモノモ亦同シ

圖面ハ一葉ニ付金十錢トス但別ニ測量ヲ要シタルトキハ其測量費ハ裁判所ノ意見ヲ以テ定ムル所ニ依ル

第三條 翻譯料ハ半枚十二行二十字詰ニ付キ金五十錢トス但半枚ニ滿タサルモノモ亦同シ

第四條 民事訴訟用印紙法ニ從ヒ貼用シタル印紙ノ費額ハ其代價ニ依ル

第五條 執達吏ノ手數料及ヒ立替金ハ執達吏手數料規則ノ規定ニ從フ

第六條 郵便料、電信料及運送料ハ其實費ニ依ル

第七條 官報公報及ヒ新聞紙ヲ以テ公告シタル公告料ハ各其定價ニ依ル

第八條　民事訴訟法第百二十七條ノ規定ニ從ヒ辯護士ノ附添ヲ命シタルトキハ其報酬ハ裁判所ノ意見ヲ以テ定ムル所ニ依ル

第九條　當事者ノ日當ハ出頭一度ニ付キ金五十錢トス但滯在費ヲ給スル場合ニ於テハ此日當ヲ二十五錢トス

第十條　證人ノ日當ハ出頭一度ニ付キ金五十錢トス但滯在費ヲ給スル場合ニ於テハ此日當ヲ給セス

第十一條　鑑定人及ヒ通事ノ日當ハ出頭一度ニ付キ金五十錢乃至五圓ノ範圍內ニ於テ裁判所ノ意見ヲ以テ定ムル所ニ依ル

鑑定ヲ爲スニ付キ別ニ支出シタル費用ハ其實費ニ依ル

第十二條　當事者ノ滯在費ハ滿八里以外ノ地ヨリ來リ滯在スルトキハ一日金二十五錢トシ證人、鑑定人及ヒ通事ノ滯在費ハ一日金五十錢トス

第十三條　當事者、證人、鑑定人及通事ノ旅費ハ海陸滿一里ニ付キ金十錢トス

通路兩線以上アルトキハ最近ノ通路ヲ以テ旅費ヲ算定ス

外國ニ在ル當事者ノ旅費ハ裁判所ノ意見ヲ以テ定ムル所ニ依ル

第十四條　判事及ヒ裁判所書記檢證ノ爲メ實地臨檢ヲ爲スニ付テノ旅費及ヒ滯在費ハ證人ニ準ス

第十五條　本法ニ定メサル必要ノ費用ハ其實費ニ依ル

第十六條　强制執行及ヒ非訟事件ニ關ル費用ハ執達吏手數料規則ニ定メタルモノヲ除ク外前數條ノ規定ヲ準用シテ之ヲ算定ス

强制執行又ハ非訟事件ニ關シテ保管人若クハ管理人ヲ任命シタルトキハ其費用ハ裁判所ノ意見ヲ以テ定ムル所ニ依ル

○民事訴訟用印紙法

明治二十三年八月法律第六十五號

朕民事訴訟用印紙法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム此法律ハ明治二十四年一月一日ヨリ施行スヘキコトヲ命ス

民事訴訟用印紙法

第一條　民事訴訟ノ書類ニハ以下數條ノ規定ニ從ヒ其正本ニ印紙ヲ貼用ス可シ但裁判所書記ニ口述シテ調書ヲ作ラシメタルトキハ其調書ニ印紙ヲ貼用ス可シ

第二條　財產權上ノ請求ニ係ル第一審ノ訴狀ニハ訴訟物ノ價額ニ應シ左ノ區別ニ從ヒ印紙ヲ貼用ス可シ

訴訟物ノ價額金五圓マテ　二十錢

同十圓マテ　三十錢

同二十圓マテ　六十錢

同五十圓マテ　一圓五十錢

同七十五圓マテ　二圓二十錢

同百圓マテ　三圓
同二百五十圓マテ　六圓五十錢
同五百圓マテ　十圓
同七百五十圓マテ　十三圓
同千圓マテ　十五圓
同二千五百圓マテ　二十圓
同五千圓マテ　二十五圓
同五千圓以上ハ千圓ニ達スル毎ニ二圓ヲ加フ

訴訟物ノ價額ヲ算定スルニハ民事訴訟法第三條乃至第六條ノ規定ニ從フ

第三條　財産權上ノ請求ニ非サル訴訟ニ付テハ其訴訟物ノ價額百圓ト看做シ印紙ヲ貼用ス可シ

財産權上ノ請求ニ非サル訴訟ト其訴訟ニ由テ生スル財産權上ノ訴訟ト併合スルトキハ其多額ナル一方ノ訴訟物ノ價額ニ依リ印紙ヲ貼用ス可シ

第四條　本訴ト反訴ト其目的カ同一ノ訴訟物ナルトキハ反訴ノ訴狀ニ印紙ヲ貼用スルヲ要セス

第五條　控訴狀ニハ第二條ノ規定ニ從ヒ其半額上告狀ニハ其全額ノ印紙ヲ加貼ス可シ

第六條　左ニ掲クル書類ニハ五十錢ノ印紙ヲ貼用ス可シ

第一　抗告
第二　故障
第三　證據調ノ申立
第四　假差押及ヒ假處分ノ申請
第五　判決ノ送達アランコトヲ求ムル申立
第六　執行力アル正本ヲ求ムル申立但此正本ノ數通ヲ求ムルトキハ其一通毎ニ五十錢ノ割合ヲ以テ印紙ヲ貼用ス可シ

第七條　和解及ヒ督促手續ニ付キ民事訴訟法第三百八十一條第三項及ヒ第三百九十條ノ規定ニ依リ訴カ區裁判所ニ繫屬スルトキハ第二條第三條ノ規定ニ從ヒ印紙ヲ貼用ス可シ

第八條　再審ヲ求ムルノ訴狀ニハ其訴ヲ爲ス可キ裁判所ノ審級ニ依リ相當ノ印紙ヲ貼用ス可シ

第九條　原狀回復ノ申立ニハ其書面ヲ差出ス可キ裁判所ノ審級ニ依リ相當ノ印紙ヲ貼用ス可シ

第十條　答辯書其他前數條ニ掲ケサル申立及ヒ申請ニハ二十錢ノ印紙ヲ貼用ス可シ

第十一條　民事訴訟法第九十七條第一號ノ場合ノ外此法律ニ從ヒ印紙ヲ貼

用セサル民事訴訟ノ書類ハ其效ナキモノトス但印紙ヲ貼用セス又ハ貼用スルモ不足スルトキハ裁判所ハ相當印紙ヲ貼用セシメ之ヲ有効ナラシムルヲ得

第十二條　印紙ノ種類及ヒ貼用方ハ明治十七年第四號布達ニ依ル

第十三條　印紙ハ管轄廳ノ許可ヲ得タル賣捌所ニ於テ發賣セシム其他ニ於テ賣買スルコトヲ許サス

第十四條　官許賣捌所外ニ於テ印紙ヲ販賣シタル者ハ二十圓以上一百圓以下ノ罰金ニ處シ仍ホ現在ノ印紙ヲ沒收ス其情ヲ知テ之ヲ買取シタル者ハ十圓以上百圓以下ノ罰金ニ處シ仍ホ現在ノ印紙ヲ沒收ス

第十五條　前條ノ規定ヲ犯シタル者ニハ刑法ノ減輕再犯加重及ヒ數罪俱發ノ例ヲ用ヰス

第十六條　第六條第十條乃至第十二條ノ規定ハ非訟事件ニ之ヲ準用ス

○家資分散法 明治二十三年八月 法律第六十九號

朕家資分散法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム此法律ハ明治二十四年一月一日ヨリ施行スヘキコトヲ命ス

家資分散法

第一條　民事訴訟法ノ强制執行處分ニ因リ義務ヲ辨濟スル資力ナキ債務者ニ對シテハ管轄裁判所ハ職權ニ由リ決定ヲ以テ家資分散者タルノ宣告ヲ爲ス可シ

右ノ決定ハ口頭辯論ヲ要セスシテ之ヲ爲スコトヲ得

此決定ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得

第二條　前條ノ申立ハ書面又ハ口頭ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得

第三條　第一條ノ宣告ハ裁判所及市町村ノ掲示場ニ掲示メ之ヲ公告ス可シ

第四條　家資分散者ハ其宣告ヲ受ケタル日ヨリ選擧權及被選擧權ヲ失フ

家資分散者ノ復權ニ付テハ商法第千五十五條以下ヲ準用ス

第五條　商法及本法施行以後ニ於テ從前ノ法律中身代限處分ヲ受ケタル者ニ對シ公權ノ喪失ヲ定メタル條項ハ破産又ハ家資分散ノ宣告ヲ受ケタル者ニ對シ効力ヲ有ス

○陸海軍軍法會議私訴裁判强制執行法 明治二十三年八月 法律第六十七號

朕陸海軍軍法會議私訴裁判强制執行法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

此法律ハ明治二十四年一月一日ヨリ施行スヘキコトヲ命ス

陸海軍軍法會議私訴裁判强制執行法

第一條　軍法會議私訴裁判ノ强制執行ハ兵營艦船若クハ軍事用廳舍ニ於テ

行フ場合ヲ除ク外軍法會議ノ囑託ニ因リ通常裁判所之ヲ行フ

第二條　軍法會議ハ軍法會議私訴裁判ノ强制執行ニ關シテハ職權ニ因リ若クハ原告人又ハ被告人ノ申立ニ因リ補充及取消ノ命令ヲ爲スコトヲ得

第三條　軍法會議私訴裁判ノ强制執行ハ判決言渡書ノ正本ニ基キ之ヲ爲ス

前項言渡書ノ正本ハ原告人ノ請求ニ因リ軍法會議之ヲ付與ス

第四條　軍法會議ハ必要ト認ムル場合ニ於テ假執行假差押假處分ノ命令ヲ爲ス

假執行ヲ命シタルトキハ其旨ヲ言渡書ノ正本ニ附記ス

本條ノ場合ニ於テハ保證又ハ供託ヲ命スルコトアルヘシ

第五條　第一條ニ依リ通常裁判所ニ於テ强制執行ヲ爲ストキハ民事訴訟法ノ規定ニ從フ

○婚姻事件養子緣組事件及ヒ禁治產事件ニ關スル訴訟規則

明治廿三年十月法律第百四號

朕民事訴訟法ノ補則トシテ婚姻事件養子緣組事件及ヒ禁治產事件ニ關スル訴訟規則ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム此法律ハ明治二十六年一月一日ヨリ施行スヘキコトヲ命ス

婚姻事件養子緣組事件及ヒ禁治產事件ニ關スル訴訟規則

第一章　婚姻事件及ヒ養子緣組事件ノ訴訟手續

第一條　婚姻ノ無效、離婚又ハ同居ヲ目的トスル訴訟ハ夫カ普通裁判籍ヲ有スル地ノ地方裁判所ノ管轄ニ專屬ス

緣組ノ無效又ハ離緣ヲ目的トスル訴訟ハ養子ヲ爲シタル者カ普通裁判籍ヲ有スル地ノ地方裁判所ニ專屬ス

婚姻又ハ緣組ノ不成立ニ關スル訴訟ハ被告カ普通裁判籍ヲ有スル地ノ地方裁判所ニ專屬ス

第二條　婚姻事件及ヒ緣組事件ニ付テハ檢事ハ口頭辯論ニ立會フノ外受命判事若クハ受託判事ノ面前ニ於テ爲ス審問ニモ亦立會フコトヲ得檢事ニハ職權ヲ以テ總テノ期日ヲ通知ス可シ

檢事ハ婚姻又ハ緣組ヲ維持スル爲メ新ナル事實及ヒ證據方法ヲ提出スルコトヲ得

調書ニハ檢事ノ氏名及ヒ其申立ヲ記載ス可シ

第三條　婚姻ノ不成立無效離婚及ヒ同居ノ訴ハ之ヲ併合スルコトヲ得

緣組ノ不成立無效及ヒ離緣ノ訴モ亦同シ

婿養子緣組ノ場合ニ於テハ婚姻ノ不成立、無效、離婚又ハ同居ノ訴ニ緣組不成立、無效又ハ離緣ノ訴ヲ合併スルコトヲ得

本條ノ訴ニ他ノ訴ヲ併合シ及ヒ他ノ種類ノ反訴ヲ提起スルコトヲ得ス但

本條ノ訴ノ原因タル事實ヨリ生スル損害賠償及ヒ養料請求ニ付テハ此限ニ在ラス

第四條　判決ニ接著スル口頭辯論ノ終結ニ至ルマテハ訴ニ於テ提出シタル以外ノ理由ヲ主張スルコトヲ得

第五條　婚姻ノ無效若クハ離婚ノ訴又ハ緣組ノ無效若クハ離緣ノ訴ニ付キ棄却ノ言渡ヲ受ケタル原因ハ前訴訟ニ於テ又ハ訴ノ併合ニ因リ主張スルヲ得ヘカリシ事實ヲ獨立ナル訴ノ理由トシテ主張スルコトヲ得ス被告ニ在テハ反訴ノ理由ト爲スヲ得ヘカリシ事實ニ付テモ亦同シ

第六條　民事訴訟法第百十一條第二項第三項第二百十條及ヒ第三百三十五條乃至第三百四十一條ノ規定ハ之ヲ適用セス

第七條　口頭辯論ノ期日ニ被告カ出頭セサルトキハ原告ノ申立ニ因リ新期日ヲ定ム可シ

被告ノ在廷セサル場合ニ於テ期日ヲ定メタルトキハ其都度被告ヲ呼出ス可シ

闕席判決ハ本條ノ手續ノ效アラサルトキニ限リ被告ニ對シテ之ヲ爲スコトヲ得

第八條　裁判所ハ原告若クハ被告ノ自身出頭ヲ命シテ其原告若クハ被告又ハ其相手方若クハ檢事ノ主張シタル事實ニ付キ原告若クハ被告ヲ審訊スルコトヲ得

審訊ヲ受ク可キ原告若クハ被告カ受訴裁判所ニ出頭スル能ハサルトキ又ハ受訴裁判所ノ所在地ヨリ遠隔ノ地ニ在ルトキハ受命判事若クハ受託判事ニ依リ審訊ヲ爲スコトヲ得

出頭セサル原告若クハ被告ニ對シテハ審訊期日ニ出頭セサル證人ニ對スル規定ヲ適用ス

第九條　和諧ノ調フ可キ見込アルトキハ裁判所ハ職權ヲ以テ離婚又ハ離緣ノ訴ニ關スル手續ヲ長クトモ一个年間中止スルコトヲ得

第十條　裁所ハ婚姻又ハ緣組ヲ維持スル爲メ當事者ノ提出セサル事實ヲモ斟酌シ且職權ヲ以テ證據調ヲ爲スコトヲ得但裁判前ニ當事者ヲ審訊ス可シ

第十一條　婚姻及ヒ緣組ノ不成立若クハ無效又ハ離婚若クハ離緣ヲ言渡ス判決ハ職權ヲ以テ之ヲ當事者ニ送達ス可シ

第十二條　婚姻事件及緣組事件ノ判決ニ付テハ假執行ノ宣言ヲ付スルコトヲ得ス

第十三條　假處分ニ關シ殊ニ配偶者ノ一方又ハ養子カ住家ヲ去ルノ許可及ヒ養料ノ供給ヲ申立テタル場合ニ於テハ民事訴訟法第七百五十六條乃至第七百六十三條ノ規定ヲ準用ス

第十四條　婚姻及ヒ縁組ノ不成立若クハ無效又ハ離婚若クハ離縁ヲ言渡シタル判決確定シタルトキハ裁判所ノ掲示板ニ掲示シテ之ヲ公告ス可シ

第十五條　民法ノ規定ニ從ヒ檢事ノ職權ヲ以テ起スコトヲ得ヘキ無效ノ訴ニ付テハ以下數條ニ定メタル特別ノ規定ニ從フ

第十六條　檢事又ハ第三者ヨリ訴ヲ起ストキハ夫婦又ハ養親子ヲ以テ相手方ト爲ス

夫婦又ハ養親子ノ一方ヨリ訴ヲ起ストキハ他ノ一方ヲ以テ相手方ト爲ス

第十七條　檢事ハ自ラ訴ヲ起サザルトキト雖モ訴訟ヲ追行シ殊ニ獨立シテ申立ヲ爲シ及ヒ上訴ヲ爲スコトヲ得

第十八條　檢事上訴ヲ爲シタルトキハ上訴手續ニ於テ前審ノ當事者雙方ヲ相手方ト看做ス

檢事カ訴訟人タル場合ニ於テ當事者ノ一方カ上訴ヲ爲シタルトキハ上訴手續ニ於テ他ノ一方ト檢事トヲ相手方ト看做ス

第十九條　訴訟人タル檢事カ敗訴スル場合ニ於テハ民事訴訟法第一編第二章第五章ノ規定ニ從ヒ勝訴者タル相手方ニ生シタル費用ハ國庫ノ負擔トス

第二章　禁治産事件ノ訴訟手續

第二十條　禁治産ノ申立ハ治産ヲ禁セラル可キ者カ普通裁判籍ヲ有スル地ノ區裁判所ノ管轄ニ專屬ス

第二十一條　申立ハ書面又ハ口頭ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得其申立ニハ申立ノ理由タル事實及ヒ證據方法ノ表示ヲ包含ス可シ

第二十二條　裁判所ハ申立ニ表示シタル事實及ヒ證據方法ニ依リ職權ヲ以テ心神喪失ノ常況ニ在ルヤ否ヲ定ムル爲メニ必要ナル探知ヲ爲シ且適當トスル證據方法ヲ調フ可シ

裁判所ハ訴訟手續ヲ開始スルノ前診斷書ノ提出ヲ命スルコトヲ得

檢事ハ總テノ場合ニ於テ申立ヲ爲シテ訴訟手續ヲ追行スルコトヲ得

證人及ヒ鑑定人訊問及ヒ宣誓ニ付テハ民事訴訟法第二編第一章第六節及ヒ第七節ノ規定ヲ適用ス

第二十三條　裁判所ハ公開セサル法廷ニ於テ一人又ハ數人ノ鑑定人ノ立會ヲ以テ治産ヲ禁セラル可キ者ヲ訊問ス可シ此訊問ハ受託判事ヲシテ之ヲ爲サシムルコトヲ得

右訊問ハ裁判所ノ意見ニ從ヒ實施シ難ク又ハ裁判ノ爲メニ必要ナラス又ハ治産ヲ禁セラル可キ者ノ健康ニ害アリトスルトキハ之ヲ爲ササルコトヲ得

第二十四條　禁治産ノ宣言ハ決定ヲ以テ之ヲ爲ス

右宣言ハ豫メ治産ヲ禁セラル可キ者ノ心神喪失ノ常況ニ付キ一人又ハ

數人ノ鑑定人ヲ訊問シタル後ニ非サレハ之ヲ爲スコトヲ得ス

第二十五條　裁判所ハ治産ヲ禁セラル可キ者ノ身體ノ監護又ハ財産ノ保存ニ付キ必要ナル處分ヲ命スルコトヲ得

第二十六條　訴訟手續ノ費用ハ治産ヲ禁シタル場合ニ於テハ禁治産者之ヲ負擔シ其他ノ場合ニ於テハ禁治産ノ申立ヲ爲シタル者之ヲ負擔ス可シ但檢事カ申立ヲ爲シタルトキハ國庫之ヲ負擔ス

第二十七條　禁治産ニ付キ爲シタル決定ハ職權ヲ以テ申立人及ヒ檢事ニ之ヲ送達ス可シ

第二十八條　禁治産ヲ宣言スル決定ハ法律上ノ後見人アルトキハ其後見人ニ職權ヲ以テ之ヲ通知ス可シ

第二十九條　申立人及ヒ檢事ハ禁治産ノ申立ヲ却下スル決定ニ對シ即時抗告ヲ爲スコトヲ得

抗告裁判所ノ訴訟手續ニハ第二十二條ノ規定ヲ準用ス

第三十條　禁治産ヲ宣言スル決定ニ對シテハ一个月ノ期間内ニ訴ヲ以テ不服ヲ申立ツルコトヲ得

訴ヲ起スノ權利ハ禁治産者其後見人及ヒ民法ノ規定ニ從ヒ禁治産ノ申立ヲ爲スノ權ヲ有スル者ニ屬ス

右期間ハ禁治産者ニ對シテハ禁治産ヲ知リタル日ヲ以テ始マリ其他ノ者ニ對シテハ後見人ノ選定ヲ以テ始マリ又法律上ノ後見ノ場合ニ於テハ其決定ヲ法律上ノ後見人ニ通知スルヲ以テ始マル

第三十一條　訴ハ區裁判所ノ所在地ヲ管轄スル地方裁判所ノ管轄ニ專屬ス

第三十二條　禁治産ニ對シテ不服ヲ申立ル訴ニハ他ノ訴ヲ併合スルコトヲ得ス

反訴ハ之ヲ爲スコトヲ許サス

第三十三條　禁治産者カ訴ヲ起サントスルトキハ其申立ニ因リ受訴裁判所ノ裁判長ハ訴訟代理トシテ辯護士ヲ之ニ附添ハシム可シ

第三十四條　第六條及ヒ第七條ノ規定ハ本章ニモ之ヲ準用ス

第三十五條　第二十三條及ヒ第二十四條第二項ノ規定ハ不服申立ノ訴ニ付テノ訴訟手續ニ之ヲ準用ス

裁判所ハ區裁判所ニ於テ爲シタル鑑定ヲ十分ナリト認ムルトキハ鑑定人ノ訊問ヲ爲ササルコトヲ得

第三十六條　不服申立ノ訴ヲ理由アリトスルトキハ禁治産ヲ宣言シタル決定ヲ取消ス可シ

然レトモ此取消ノ判決ハ後見人ノ既ニ爲シタル行爲ノ效力ニ影響ヲ及ホサス

第三十七條　不服申立ノ訴ニ關スル訴訟費用ニ付テハ第二十六條ノ規定ヲ

準用ス

第三十八條　受訴裁判所ハ禁治産事件ニ付キ爲シタル總テノ終局判決ヲ區裁判所ニ通知ス可シ

第三十九條　禁治産ノ解止ニ付テハ第二十五條ヲ除クノ外本章ノ規定ヲ準用ス

第四十條　準禁治産事件ニ付テハ左ノ特別ナル規則ヲ除クノ外本章ノ規定ヲ準用ス

第二十二條第二項ハ涙費者ニ之ヲ適用セス

又同條第二項第二十五條第三十三條及ヒ檢事ニ關スル規定ハ總テノ準禁治産者ニ之ヲ適用セス

準禁治産ヲ解止スル決定ニ對シテハ不服ヲ申立ツルコトヲ得ス

○執達吏代理鑑札調製方

明治二十三年九月司法省訓令第三號

裁判所

執達吏規則第十四條ニ依リ區裁判所ヨリ交付スヘキ鑑札ハ左ノ通リ調製スヘシ

執達吏登用規則ハ本卷第五類一丁ニ載ス

「表」

第　號

「面」

○某區裁判所執達吏代理之證

「裏」

○某區裁判所

「方曲尺一寸」

某區裁判所印

「烙印」

（一）内及印章ハ朱）

「面」

木製ニシテ竪曲尺三寸幅曲尺一寸五分厚サ適宜

鑑札番號ヲ付シ交付ノ時々番號及年月日氏名ヲ帳簿ニ登錄シ置クヘシ

廳印ハ烙印ニテ方曲尺一寸タルヘシ

○執達吏登用規則中追加改正

明治二十三年六月司法省令第六號

明治二十三年八月本省令第二號執達吏登用規則中左ノ通追加改正ス

第二十一條三項區裁判所書記ハ職務修習ヲ要セス執達吏ニ任セラルヽコトヲ得

第二十二條　試驗及第者及第十二條ニ掲ケタル者ニノ職務修習ヲ終リタル者竝ニ區裁判所書記ヨリ轉任スル者ノ任補ハ執達吏ノ缺員アルヲ待テ控訴院長之ヲ攝行ス

○民事訴訟法第十四條ニ依リ國ヲ代表スルニ附テノ規定

明治二十四年一月勅令第三號

朕民事訴訟法第十四條ニ依リ國ヲ代表スルニ付テノ規定ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

第一條　各省大臣ハ其所管事務ニ係ル民事訴訟ニ付國ヲ代表ス

第二條　北海道廳長官及府縣知事ハ其司掌又ハ監督スル國ノ事務ニ係ル民事訴訟ニ付國ヲ代表ス

第三條　特別ニ地方機關ヲ有スル各省大臣ハ省令ヲ以テ民事訴訟ニ付國ヲ代表スルノ權利ヲ之ニ委任スルコトヲ得

第四條　官制其他特別ノ勅令ヲ以テ民事訴訟ニ付國ヲ代表スル者ヲ定メタルトキハ本令ニ依ル限ニ在ラス

○官林ニ關スル民事訴訟ニ附キ國ヲ代表スル權利委任

明治二十四年一月農商務省令第一號

大林區署

官林ニ關スル事件ニシテ大林區署ノ司掌ニ屬スルモノヽ民事訴訟ニ付テハ本年勅令第二號第三條ニ依リ所轄大林區署長ニ國ヲ代表スルノ權利ヲ委任ス

○民事訴訟ニ附キ國ヲ代表スル權利委任

明治二十四年三月大藏省令第五號

明治二十四年一月勅令第三號ニ據リ造幣局及各稅關ニ係ル民事訴訟ニ付テハ造幣局長當該稅關長ニ國ヲ代表スル權利ヲ委任ス

○同上

明治二十四年三月陸軍省令第三號

明治二十四年一月勅令第三號第三條ニ據リ本大臣所管事務ニ係ル民事訴訟ノ內第二第三第四第五第六各師管內ニ於テ生シタル事件ニ就テハ當該師團監督部長ニ北海道ニ於テ生シタル事件ニ就テハ屯田兵監督部條例施行ニ至ルマヲハ屯田兵司令官ニ國ヲ代表スルノ權利ヲ委任ス

○同上　明治二十四年三月　海軍省令第二號

明治二十四年一月勅令第三號ニ依リ各鎮守府所管事務ニ係ル民事訴訟ニ付テハ當該鎮守府造船部長主計部長建築部長ニ國ヲ代表スルノ權利ヲ委任ス

○郵便電信爲替及郵便貯金事務ニ係ル民事訴訟ニ附キ國ヲ代表スル權利委任　明治廿四年六月　遞信省令第四號

明治廿四年一月勅令第三號第三條ニ據リ郵便、電信、郵便爲替及郵便貯金事務ニ係ル民事訴訟ニシテ各一等郵便電信局及一等郵便局監督區內ニ於テ生シタル事件ニ就テハ當該局長ニ國ヲ代表スルノ權利ヲ委任ス

○鐵道廳ノ司掌ニ屬スル民事訴訟ニ附キ國ヲ代表スル權利委任　明治廿四年七月　內務省令第九號

鐵道廳

鐵道ニ關スル事件ニシテ鐵道廳ノ司掌ニ屬スルモノヽ民事訴訟ニ付テハ本年勅令第三號第三條ニ依リ鐵道廳長官ニ國ヲ代表スルノ權利ヲ委任ス

○訴訟書類郵便送達手數料納付方　明治廿四年六月　勅令第五十四號

訴訟書類郵便送達手數料ノ件ヲ裁可シ玆ニ之ヲ公布セシム

民事訴訟法第百三十六條ニ依リ郵便ヲ以テ訴訟書類ノ送達ヲ爲ストキハ郵便稅書留手數料ノ外送達手數料トシテ一通ニ付五錢ヲ納ムヘシ但其手數料ハ郵便切手ヲ以テ前納スルモノトス

○債權者ノ差押タル大藏省預金局保管ニ係ル保管金供託金錢及有價證券ノ差押命令ヲ裁判所ヨリ大臣局長ニ送ル片寄託ノ要項記載方　明治廿四年五月　司法省訓令第三號

爾後大藏省預金保管ニ係ル保管金又ハ供託金錢及ヒ有價證券ニシテ債權者ニ於テ他ノ債務ノ爲メニ其債權ヲ差押ヘタルニ當リ裁判所カ差押命令ヲ大藏大臣若クハ預金局長ニ送ルトキハ其寄託ニ係ル金額年月日番記等漏ナク明記スヘシ

○訴訟法中辨護士ノ執ルヘキ事務ハ姑ク代言人取扱フ　明治廿三年十月　司法省訓令第四號

裁判所

訴訟法中辨護士ノ執ル可キ事務ハ追テ辨護士ヲ置カルヘキニ付當分ノ內代

言人之ヲ取扱フ儀ト心得ヘシ但上席檢事ハ此旨管內代言人ヘ通達スヘシ

○代言人

○代言人引續免許ハ滿期前必ス出願セシムル樣注意セシム　明治廿四年三月　司法省令第一號

各地方裁判所檢事正及支部檢事

代言人引續免許ノ出願ハ代言人規則第八條ノ通必ス免許滿期前之ヲ爲ヘキ筈ナルニ期限經過後種々ノ理由ヲ陳述シテ願書ヲ差出ス者往々有之右ハ期限ニ迫ラス何時ニ出願スルモ差支無之ヲ緩漫ニ渉ルハ不都合ノ次第ニ付自今等閑ニシテ出願ノ期ヲ失スルコト無之樣精々注意セシム可シ

第三十三類　刑事

○刑法

○竊盜罪處分方　明治二十三年十月　法律第九十九號

朕竊盜ノ罪ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム此法律ハ明治二十三年十一月一日ヨリ施行スヘキコトヲ命ス

第一條　家屋其他ノ建造物外ニ於テ犯シタル竊盜ニシテ未タ遂ケサル者又ハ已ニ遂ケタルモ其贓額五圓ニ滿サル者ハ十一日以上二月以下ノ重禁錮ニ處ス

第二條　田野、山林、川澤、池沼、湖海ニ於テ其產物ヲ竊取セントシ又ハ牧場ニ於テ其獸類ヲ竊取セントシテ未タ遂ケサル者又ハ已ニ竊取シタルモ其贓額五圓ニ滿サル者亦前條ニ同シ

第三條　前二條ニ記載シタル贓額ハ犯罪ノ地及其時ニ於ケル物價ニ據リ裁判所之ヲ定ム但贓物現存セサルトキハ其中等ノ價額ニ據ル可シ

○刑法中官廳官署及官吏等ヲ公署公吏等ニ適用　明治二十三年十月　法律第百號

朕公署、公吏並公署ノ印、文書及免狀鑑札ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布

セシム此法律ハ明治二十三年十一月一日ヨリ施行スヘキコトヲ命ス

刑法中官廳、官署ニ關スル條項ハ公署ニ適用シ官吏ニ關スル條項ハ公吏ニ適用シ官ノ印、文書及免狀、鑑札ニ關スル條項ハ公署ノ印、文書及免狀鑑札ニ適用ス

○刑法附則中改正追加 明治二十三年十月 法律第百二號

朕刑法附則中改正追加ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

刑法附則第四十九條ヲ左ノ如ク改メ次ニ左ノ三條ヲ加フ

第四十九條　證人ノ日當ハ出頭一度ニ付金五十錢乃合ニ於テハ此日當ヲ給セス

第四十九條乙　醫師鑑定人通辯人飜譯人ノ日當ハ出頭一度ニ付金五十錢乃至金五圓ノ範圍內ニ於テ裁判所ノ意見ヲ以テ定ムル所ニ依ル

第四十條丙　證人醫師鑑定人通辯飜譯人ノ旅費ハ陸海滿一里毎ニ付キ金十錢トス通路兩線以上アルトキハ最近ノ通路ヲ以テ旅費ヲ算定ス

第四十九條丁　前條ニ記載シタル者ノ止宿料ハ滿八里以外ノ地ヨリ來リ滯在スル時ハ一日金五十錢トス

○刑死者ノ墓標寫眞等ニ係ル取締方 明治二十四年七月內務省令第十一號

第一條　刑死者ノ墓標ニハ氏名、法號、族籍、年齡、生死ノ年月日ヲ記入スルニ止メ他ノ事項ヲ記スルコトヲ得ス

其墓標ハ遺骸埋葬地又ハ祖先塋域ノ外之ヲ建設スルコトヲ得ス

異樣ノ墓標ヲ建設シ及文字ニ彩色ヲ施スコトヲ得ス

第二條　所轄警察署ノ許可ヲ得スシテ刑死者ノ爲メ公然祭祀ヲ行フコトヲ得ス但親族ノ香花ヲ供スルノ類ハ此限ニ在ラス

第三條　刑死者ノ寫眞其他肖像ヲ公然陳列シ又ハ販賣スルコトヲ得ス

其他總テ刑死者ヲ賞揚哀悼スルコトヲ得ス

第四條　前各條項ニ違背シタル者ハ二圓以上二十五圓以下ノ罰金若クハ十一日以上二十五日以下ノ輕禁錮ニ處ス

第五條　犯罪ニ關シ現ニ搜査、起訴、勾留、服刑中ノ者若クハ搜査、起訴、勾留服刑中ニ死去シタル者及刑ヲ免レント欲シテ自殺シ或ハ犯罪現行ノ際殺害セラレタル者ニ付地方長官（東京府ハ警視總監）ハ安寧秩序ヲ保持スルニ必要ナリト認ムルトキハ特ニ命令ヲ下シ第一條第二條第三條ニ揭クル所爲ヲ禁スルコトヲ得其命令ニ違背シタル者ハ第四條ニ據リ處分ス

○命令ノ條項違犯ニ關スル罰則 明治二十三年九月 法律第八十四號

勅命令ノ條項違犯ニ關スル罰則ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

命令ノ條項ニ違犯スル者ハ各其ノ命令ニ規定スル所ニ從ヒ二百圓以内ノ罰金若ハ一年以下ノ禁錮ニ處ス

○重罪輕罪ノ公訴ノ判決ニ對シ控訴アリタル場合上告ニ由リ他ノ裁判所ニ移スノ言渡アリタル場合ニ被告人拘禁中ノ費用支辨方　明治二十三年十月内務省令第五號

重罪輕罪ノ公訴ノ判決ニ對シ控訴アリタル場合又ハ上告ニ由リ他ノ裁判所ニ移スノ言渡アリタル場合ニ於テ被告人拘禁中ノ費用竝ニ裁判確定ノ後囚人ニ係ル費用ハ總テ最前裁判言渡アリタル地方ノ監獄費ヲ以テ支辨シ其費額ハ一人一日金二十錢トス

但裁判確定後ノ囚人ハ汽車又ハ汽船ニ依リ最モ押送ニ便ナル地方ニ在テハ原地方廳ノ請求ニ依リ送還スルコトヲ得此場合ニ於テハ護送官吏ノ旅費及囚人ニ屬スル費用ハ請求地方ノ負擔トス

第三十四類　治罪

○治罪

○刑事訴訟法　明治廿三年十月法律第九十六號（署之）

○東京地方裁判所管内各區裁判所ノ管轄ニ屬スル刑事裁判事務取扱方　明治廿三年十月司法省告示第五十二號

東京地方裁判所管内各區裁判所ノ管轄ニ屬スル刑事裁判事務ハ當分ノ内其管轄區裁判所ノ判事撿事出張東京地方裁判所内ニ於テ之ヲ取扱ハシム

第三十五類　監獄

○監獄

○海軍監獄則施行細則　明治二十三年九月　海軍省令第十四號

海軍監獄則施行細則左ノ通定ム

海軍監獄則施行細則

第一章　規程

第一條　此規則ニ於テ在監人ト稱スルハ囚人懲治人及刑事被告人ヲ云フ

第二條　新ニ入監スル者アルトキハ監獄課長其引致シ來リタル者ニ領收證ヲ交付シ之ヲ入監セシム

入監セシムルトキハ先ツ一小房内ニ於テ通身ヲ檢査シ了リテ名籍簿ニ要項ヲ詳錄シ仍ホ房内掲示ノ事項ヲ說示ス可シ

第三條　各監房内ニハ在監人ノ遵守ス可キ事項ヲ掲示シ傍訓ヲ施シ解シ易カラシム可シ其事項左ノ如シ

一　在監人ハ互ニ和順ヲ主トシ常ニ命令ヲ謹守ス可シ

一　毎朝常用ノ諸器具ヲ清潔ニシ之ヲ排列シテ點檢ヲ受ケ及席壁厠圊ヲ掃除ス可シ

一　窓壁若クハ物件ヲ汚損シ不淨器ノ外ヘ唾ハキ及貯水ヲ濫用ス可ラス

一　房外ニ出タルトキハ他人ト手ヲ交ヘ又ハ濫リニ交談ス可ラス

一　夜間ハ最モ鎮靜ヲ主トシ說話發聲又ハ濫リニ起步ス可ラス但晝間ト雖モ放歌喧噪又ハ高聲ニ誦讀シ及隣房ヘ通聲交談ス可ラス

一　許可ヲ得サル物品ヲ監房ニ置キ或ハ勝負ヲ爭ヒ若クハ賭博類似ノ遊戲ヲナシ或ハ他人ニ汚辱ヲ被ラシメ猥褻ニ涉ルカ如キ所爲アル可ラス

一　服役中雜談シ及服役セサル時間タリト雖モ部外ノ役場ニ到ル可ラス

一　許可ヲ得スシテ物品ヲ授受貸借ス可ラス

一　監房ニ於テ異常ノ事アレハ晝夜ニ拘ハラス直ニ看守所ニ通聲ス可シ

一　病者アルトキハ同房ノ者共ニ介保シ看病人タル者ハ切實ニ之ヲ看護ス可シ

第四條　領置ノ貨物ハ其名數ヲ簿冊ニ記載シ監獄課長之ニ證印ス可シ

領置ノ貨物ハ本人釋放又ハ假出獄ノ時之ヲ下付ス可シ

第五條　領置物品中保存ニ堪ヘ難キモノハ本人ヘ告知ノ上之ヲ賣却シテ其代金ヲ領置スルコトヲ得

第六條　入監中外人ヨリ差入タル貨物ニシテ領置スルモノ亦第四條第五條ノ例ニ依ル

第七條　總テ監房ニ入ルヽ物品ハ監獄課長之ヲ點檢シ危險ノ虞アルヽノハ一切之ヲ禁ス可シ

第八條　入監後出房セシメタル者ニ對シテハ還房ノ際通身ノ檢査ヲ爲ス可シ

第九條　通身ノ檢査ハ一人宛之ヲ爲シ他人ヲシテ見セシム可ラス但役場等ヨリ一時多人數ヲ還房セシムル場合ハ此限ニアラス

第十條　監獄課長監護長ハ日夜不時ニ監獄ノ內外ヲ巡視ス可シ但監護長ノ巡視ハ一晝夜三回以上タル可シ

第十一條　監獄課長ハ監護ヲシテ受持場ヲ定メ晝夜絕ヘス之ヲ巡警セシム可シ

第十二條　監護長ハ每日在監人ノ員數ヲ點檢シ每日一回以上監房ヲ檢査ス可シ

第十三條　囚人懲治人ノ放免期日ハ入監後直ニ監獄課長之ヲ調査シ名籍簿ニ記入ス可シ

第十四條　囚人懲治人ヲ釋放スルトキハ監獄課長名籍簿ニ照シテ其氏名等ヲ問糺シ釋放スル旨ヲ言渡ス可シ刑事被告人ヲ放免若クハ責付スルトキ亦同シ

第十五條　刑事被告人中共犯人アルトキハ其監房ヲ別異シ談話通聲スルコトヲ得サラシメ軍法會議又ハ他監ニ引致スルトキ亦同行セシムルコトヲ

得ス

第十六條　在監人ヲ他監ニ移ストキハ其名籍又ハ宣告書其他必要ノ文書及領置ノ貨物ヲ具シテ送致ス可シ

第十七條　准士官以上ノ軍人若クハ同等ノ軍屬ヲ押送スルトキハ成ル可ク人目ニ觸レサラシム可シ

婦女ヲ押送スルトキハ男子ト別異ス可シ

第十八條　特赦假出獄ノ申渡ハ其裁可又ハ許可ノ監獄課ニ達シタルトキヨリ二十四時内ニ之ヲ爲ス可シ

特赦假出獄ノ申渡ヲ爲シタルトキハ之ヲ所屬長ヲ經テ鎮守府司令長官ニ申渡シ鎮守府司令長官ハ之ヲ海軍大臣ニ申渡ス可シ

第十九條　假出獄ノ申渡ヲ受ケタル者下士以下ナルトキハ監獄課長其證票ヲ與ヘ本人ヲ其所屬長ニ護送ス可シ

第二十條　假出獄ヲ許サレタル者重罪輕罪ヲ犯シ刑ノ言渡ヲ受ケタルトキハ監獄課長假出獄ノ停止ヲ言渡シ其旨ヲ鎮守府司令長官及犯人ノ所屬長ニ申報ス可シ

第二十一條　死刑ハ受刑者自衣著用ノ儘之ヲ執行スルコトヲ得

第二十二條　監房ハ監護長ノ立會アルニアラサレハ開扉スルコトヲ得ス但在監人ナキトキハ此限ニアラス

第二十三條　囚人懲治人ノ監房ニハ壘ヲ敷クコトヲ得ス但病室拘留囚及十日以下ノ禁錮囚ノ監房ハ此限ニアラス

第二十四條　監房常置ノ器具左ノ如シ

一　貯水器木製　一　飲器木製　一　唾壺木製或ハ竹製

一　便器木製但監房ニ圓固アルモノハ此器ヲ用ヒス　一　洗手盥木製　一　小桶

一　小箒草ノ種類ヲ用テ製作セシ軟ナルモノ　一　雑巾　一　木櫛

第二十五條　在監人ニハ莞筵枕簟(或ハ合羽)笠手巾褌丈二尺ヲ貸與シ鞋(若クハ草履)用紙ヲ給與スルコトヲ得

第二十六條　閉室ハ暗ニ空氣ヲ流通セシメ毫モ光線ヲ通セサラシムルヲ要ス

第二十七條　接見室ハ監舍ノ首部ニ置ク可シ

第二十八條　各監房ノ鑰匙ハ彼此適用スヘキ爲メ其製式ヲ同クス可シ

第二十九條　監房ノ鑰匙ハ常ニ一定ノ場所ニ置キ監護長之ヲ監守ス可シ

第三十條　看守所ニハ閉室ヨリ鐵線ノ類ヲ通架シ置キ發病等ヲ報スルノ用ニ供ス可シ

第三十一條　監獄ニハ防火具ヲ備ヘ置ク可シ

第三十二條　燈火ハ監房外ニ置キ在監人之ニ觸ルヽノ虞ナカラシム可シ

第二章　役法

第三十三條　定役ニ服ス可キ入監人アルトキハ監獄課長醫官ヲシテ其身體ヲ診視セシメ其體力ノ強弱ヲ分チ之ヲ課ス可シ

其役業ハ無興味無生産ナルモノ又ハ兵役若クハ軍用ニ適切ナルモノヽ内ヲ撰ム可シ

輕禁錮ノ囚服役セント請フ者アルトキハ之ヲ許ス可シ

第三十四條　毎日囚人ヲシテ役ニ就カシムルニ際シ悉ク之ヲ監房外ニ整列セシメ監護長監護點檢ヲ爲ス可シ還房セシムルトキ亦同シ

第三十五條　起床還房就役休役能役就寢其他動止ヲ令スルハ鈴若クハ梆ヲ以テシ全監一齊ニ動止セシム可シ

第三章　衛生及死亡

第三十六條　監獄ハ常ニ清掃シ不潔ナラシメサルヲ要ス

監獄内ノ厠溷並ニ便器ハ庫數ヲ定メテ掃除シ常ニ清潔ナラシム可シ

第三十七條　病者ノ居室身體衣類寢具等ハ特ニ清潔ニ爲ス可シ

第三十八條　刑事被告人定役ニ服セザル囚人懲治人ハ毎日一時間以内監房外ニ於テ運動ヲ許ス

第三十九條　衣類寢具雜具其他ノ物品ハ種質ニ由リ時時熱湯ヲ用ヒテ之ヲ澣ヒ又ハ大氣ニ晒シ臭氣ヲ去リ蟲害ヲ防クヲ要ス但病者ノ物品ト混一シテ之ヲ晒洗ス可ラス

第四十條　刑事被告人ハ毎年六月ヨリ九月マテ三日毎ニ一次十月ヨリ五月マテ七日毎ニ一次入湯セシメ剪髮ハ二月毎ニ一次剃鬚ハ一月毎ニ一次トス

囚人懲治人ハ冷浴トシ度數ハ監獄課長適宜之ヲ定ム但一日一回ニ過クルコトヲ得ス其剪髮剃鬚ハ刑事被告人ニ同シ

醫官ノ申出ニ依リ臨時浴湯若クハ剪髮剃鬚セシムルハ前二項ノ例ニアラス

婦女ノ頭髮ハ膏油類ヲ用ヒ及裝飾スルコトヲ許サス

第四十一條　刑事被告人ノ親屬故舊ヨリ澣濯ノ爲メ其衣類ノ下付ヲ請フトキハ本人ノ承諾ヲ得テ監獄課長之ヲ許可スルコトアル可シ

第四十二條　傳染病流行ノ兆アルトキハ其隊防ヲ愼密ニス可シ若シ在監人中傳染病者アルトキハ可成離隔ノ室ニ移シ其消毒ヲ嚴ニシ速ニ病性及感染ノ狀勢ヲ詳悉シ所屬長ヲ經テ鎮守府司令長官ニ申報シ鎮守府司令長官ハ之ヲ海軍大臣ニ申報シ且其旨ヲ市町村長及警察署ニ通知ス可シ

第四十三條　傳染病流行ノ際ハ飲食物ノ差入ヲ停止スルコトヲ得

第四十四條　傳染病流行地ヲ發シ若クハ其地方ヲ經過シタル者新ニ入監スルトキハ一週日以上他ノ者ト離隔シ其携有スル物品ハ消毒ヲ行フ可シ

第四十五條　軍法會議訊問中ノ在監人死亡シタルトキハ之ヲ主理ニ申報ス

可シ

第四十六條　軍人軍屬ノ死亡シタルトキハ海軍監獄則第二十八條ニ從ヒ海軍規定ノ常例ニ依リテ處分ス可シ

第四十七條　軍人軍屬ニ非サル在監人死亡シタルトキハ左ノ諸項ニ依リテ處分ス可シ

一　病死者ハ醫官ノ診察ニ據リ病症及其因由竝ニ死亡ノ年月日ヲ名籍簿ニ記載ス可シ若シ變死シタルトキハ醫官ノ檢案ニ據リ死亡ノ因由及其年月日場所死狀等ヲ名籍簿ニ詳記ス可シ

二　死者ノ親屬若クハ故舊ニ遺骸ヲ下付スルトキハ其證書ヲ取リ置ク可シ

三　監獄課ニ於テ遺骸ヲ假葬スルトキハ棺ニ入テ之ヲ埋メ其上ニ面三寸長三尺五寸ニ過キサル氏名標ヲ建ツ可シ

四　遺骸ハ假葬シタル後ト雖モ下付ヲ請フ者アルトキハ之ヲ許ス

五　死亡者領置ノ貨物アルトキハ親屬ニ下付ス刑死者ノ貨物モ亦同シ

六　親屬遠地ニ在テ物品ヲ送付スルニ入費ヲ要スルモノハ賣却シテ代價ヲ遞送スルコトヲ得但遞送費ハ親屬ノ自辨トス

七　假葬シタル死亡者刑死者ノ遺骸ニシテ滿三年ニ至ルモ引取人ナキトキハ更ニ合葬スルコトヲ得但合葬シタルトキハ其墓標ニ石ヲ用フ可シ

第四章　書信及接見

第四十八條　在監人ヨリ發スル信書ハ書信紙ヲ用ヒシメ監獄課長之ヲ封緘遞送スルモノトス但郵便稅ハ自辨トス

官司ノ訊問ニ由テ發信ヲ要スルトキハ郵便稅ヲ官費トス

第四十九條　信替ヲ檢閲スルニ先ツ直行順讀シ次ニ逆讀斜讀又ハ横讀シ不正不良ノ文意アルヤ否ヲ詳査ス可シ

第五十條　在監人ニ接見セントヲ請フ者アルトキハ監獄課長其氏名身分住所職業及緣由ヲ詳悉シタル上之ヲ許スモノトス但刑事被告人ニ係ルトキハ監獄課長主理ニ照會シテ之ヲ許否ス可シ

接見ノ時間ハ三十分時ヲ過クルヲ得ス但死刑ノ執行以前及重罪囚ヲ地方監獄ニ押送スル以前ニ於テハ特ニ一時間ノ接見ヲ許スコトヲ得

接見ヲ許シタル者若シ接見ヲ請ヒシ旨趣ニ違フ談話ヲ爲スカ又ハ姿貌其他形狀等ヲ以テ相通スル形跡アルトキハ之ヲ停止ス可シ

接見ヲ爲ストキハ監護長監護之ニ立會フ可シ

第五十一條　病者トノ接見ハ醫官ノ意見ニ據リ病室ニ於テ之ヲ爲サシムルコトヲ得

第五章　差入品

第五十二條　刑事被告人ニ差入ル可キ飲食物ハ酒類及烟草ヲ除キ監獄内ニ於テ炊烹ヲ要セサルモノニシテ一日三回一人一食ノ量ニ限ル

第五十三條　總テ差入品ハ監護長監護之ヲ檢査シ毒氣酒氣又ハ包藏物其他通謀ノ媒介トナルモノナキヤ否ヲ精檢ス可シ但飲食物ハ醫官ノ檢査ヲ經可シ

第六章　賞譽

第五十四條　賞表ハ曲尺横二寸竪一寸ノ淺葱色ノ布ニシテ賞譽セシ毎ニ之ヲ與ヘ上衣ノ左袖肩臂間ノ表面ニ縫著スルモノトス

第五十五條　賞表ヲ有スル者ニハ法律規則ノ範圍内ニ於テ成ル可ク之ヲ優遇ス可シ

第五十六條　囚人懲治人左ニ掲ケタル所爲アルトキハ其賞トシテ三日以内ヲ限リ役時ヲ短縮セシメ又ハ勞役ヲ緩弛セシムルコトヲ得但賞表ヲ與フルノ限ニ在ラス

一　在監人ノ逃走セントスル者ヲ密告シタルトキ

二　人命ヲ救援シ及逃走者ヲ捕得シタルトキ

三　監獄ニ係ル水火風災ヲ防禦シタルトキ

刑事被告人前項ノ所爲アルトキハ之ヲ錄シテ主理ニ申報ス可シ

第七章　懲罰

第五十七條　減食受罰者ハ其罰則中別房ニ入レ置ク可シ

第五十八條　懲罰ヲ受ケタル者ノ居房ハ其改悛ノ情著シキニ至ルマテ之ヲ別異スルコトヲ得

第五十九條　犯則者ニシテ事未タ發覺セサル前ニ於テ司獄官吏ニ自首シタルトキハ其懲罰ヲ全免又ハ減輕スルコトヲ得

數犯俱發シタルトキハ一ノ重キニ從ヒ處罰ス可シ

第六十條　懲罰ニ處セラレタル者裁判事件ニテ出廷スルトキハ當日ニ限リ其執行ヲ中止ス可シ但中止中經過セシ日數ハ懲罰期限ニ算入ス可ラス

明治廿四年十一月廿七日印刷
同　廿四年十一月廿八日出版

〔實價金壹圓七拾五錢〕

著作者　千葉縣士族　緩鹿實彰
東京神田區表神保町拾番地寓

發行者　東京府平民　齋藤孝治
仝　神田區裏神保町四番地

印刷者　田中正造
仝　神田區柳原川岸十四號地

發行所　東京神田區裏神保町七番地　明法堂

各府縣特別賣捌書肆

東京ヶ[illegible]三丁目十番地	博文社
同 [illegible] 何[illegible]	共益商社
同 [illegible] 本[illegible] 通一丁目	丸善商店
同 [illegible]	北島茂兵衛
同	大倉孫兵衛
同 通四丁目	牧野善兵衛
同 本町三丁目	金港堂
同 本石町	中央堂
同 新大坂町	小林喜右衛門
同 神田一ッ橋通リ	有斐閣
同 裏神保町	富山房
同	三省堂
同 小川町	日集社
同 雉子町	國成社
同 表神保町	中西屋
同	開成館
同	斯文堂
同	八尾新平
同	吉岡善兵衛
大坂備後町	前川善兵衛
同 南久寶寺町	岡崎眞助
同 本町四丁目	柳原喜兵衛
同 北久太郎町四丁目	岡上書店
京都東洞院三條上ル	村黑文次郎
同 河原二條下ル二丁目	大屋書店
名古屋鐵炮町	三輪善兵衛
愛知縣松江天神町	川岡清助
藝州廣島	松村善助
宮城仙臺大町四丁目	木村謹社
備前岡山仲ノ町	細谷久助
駿州靜岡江川町	度瀬文林堂
甲府常盤町	内藤書店
美濃大垣	岡安慶助
同 岐阜	三浦源助
信州長野	西澤喜太郎
加州金澤尾張町	牧野作平
越前福井	中田清兵衛
越中富山四十物町	品川爲吉
肥前長崎	鶴野常藏
筑前福岡	山崎登
肥後熊本	長津次郎
紀州和歌山	田源兵衛
勢州津	住謹次郎
土州高知	澤本駒吉
豐後大分	豐田正三郎
薩州鹿兒島	池田政保助
播州神戸	山川太郎
伊豫西條	船井宇一郎
阿波德嶋	伊藤萬吉
上州前橋	坂井喜久
常州水戸	中澤左衛門
下總茂原	柳平茂兵衛
	丸屋

禁電子式複写

030931-003-5

CZ-5-0209

現行日本法令類編

第1，2，4，5巻

緩鹿　実彰／編

M22-25

BBC-0268